

レコード誕生物語 その時、名盤が生まれた

第60回

日本でだけ発売されてきた裏には
日本のレコード会社の影の努力がある
「バックハウス／最後の演奏会」

■芳岡正樹

舞台人としての本懐を
遂げたピアノリスト

ヴィルヘルム・バックハウス氏
(西独ピアノリスト) 六月二十九日、オーストリアのクラッツェンフルトでのベートーベン・コンサートで演奏中に倒れ、ホテルで再び心臓マヒを起こしてフィラッハの病院に収容されていたが五日、脳出血のため死去。八十五歳。(UPI)
〔毎日新聞 昭和44年7月7日朝刊より〕

バックハウス(1884～1969)は全国紙にその死が報道されるほど、日本人に馴染み深いピアノリストだった。『毎日新聞』は死去の2日後の7月7日にUPI通信社が配信した計報に、論説を加えて報道。『朝日新聞』と『読売新聞』は、同じく7日にAFP通信社が配信した計報を伝え、朝日新聞は翌8日の夕刊に音楽評論家の門馬直美氏による「バックハウスを悼む」という追悼記事を掲載、読売新聞は19日の夕刊

の文化欄で、音楽評論家の吉田秀和氏による「音楽時評」の記事で「一時代去った感 バックハウスの死から」の見出しで、追悼記事を掲載した。この7月はアポロ11号が人類を初めて月に着陸させた(20日)月にもあたり、いつそう時代の変わり目を入々に印象づけたのであろう。

バックハウスが85歳の高齢で亡くなる直前まで演奏活動を続けていたことは、冒頭の計報でも確認できるし、吉田氏の追悼記事にも書かれている。

「私は昨年の夏ザルツブルクで彼がカール・ベームの指揮するウィーン・フィルハーモニーとブラームスの第二ピアノ協奏曲を弾くのをきいた。私にとっては、これが最初で最後の機会だった。昨年もしつは、その春に何か心臓の故障だとかで出演を危ぶまれていたのだが、約束通りやって来て、見事に弾き終え、当日の満員の客ばかりでなく、噂をきいて心配していた世界中の好楽家をよるこぼせた。(略)外国の新聞によると、彼は今年の六月二十九日も演奏会の途中で急に弱ってしまったが、ちよつと中断しただけで、また起き上が

り終わりまでひき通したとのことである。この人には「古武土的な一徹で、諸告の一言を何より重んずる」というところがあった。

吉田秀和氏が接したブラームスのピアノ協奏曲第2番の演奏後、バックハウスは握手を求めたエリック・ヴェルバ(オーストリアのピアノリスト)に向かって「人生の最後の瞬間まで音楽をやっていた」と語ったという。ヴェルバは、この言葉は「老齢になって公的、それも世界規模の公開コンサートの大きな負担にどうやって耐えられたのかという問いに対する答えであった」と述懐している(『Österreichische Musikzeitschrift』1969年12月号より)。まさにバックハウスは舞台人としての本懐を遂げたピアノリストだった。

さまざまな栄誉に
包まれた晩年

ここで、バックハウスの第二次世界大戦後から最後の演奏会へ至る道程を辿ってみよう。バックハウスは夫妻で1930年にスイス、ルガーノに移住し、翌31年にはドイツ国籍をもつたまま、スイスの市民権を得ていたが、ナチス・ドイツ政権下で演奏活動を続けたことが戦後、問題となった。バックハウスのオーストリアでの演奏会復帰は47年4月にウィーン楽友協会での演奏会だった。49年6月1日、ベートーヴェン祭に際してボン市のGoldenes Buchにその名が記載され、ドイツでの演奏活動も本格的に再開した。54年3月には28年ぶりにアメリカを訪れ、カーネギー・ホールでのベートーヴェン・プログラムで大成功を収め、その後、4月から5月には初来日して、東京、名古屋、大阪、京都、福岡で公演を行ない、わが国の愛好家の前でその至善を披露している。

録音活動はスイスで市民権を得ていたことが幸いし、戦前

から専属だった英HMVと46年に新たな3年契約を結ぶことができた。同年7月にはウォルター・レグのプロデュースにより、チューリヒでの3日間のセッションを行なったが、原盤をイギリスに輸送する際の不備で、すべて使用不能となりバックハウスを落胆させた。レグは47年3月にバックハウスをロンドンに招こうと試みたが、不信任を抱いたバックハウスはこれを拒否。結局、48年3月のチューリヒでの3日間のセッションがHMVへの戦後唯一の録音となった。バックハウスを迎え入れたのは英デッカの代理店「ムジックフェアアトリープ(Musikvertrieb AG)」をチューリヒで経営するモーリス・ローゼンガルテンだった。バックハウスは50年7月より亡くなるまで英デッカに在籍し、LPで44枚、CDに直して30枚に及ぶ名盤を残した。

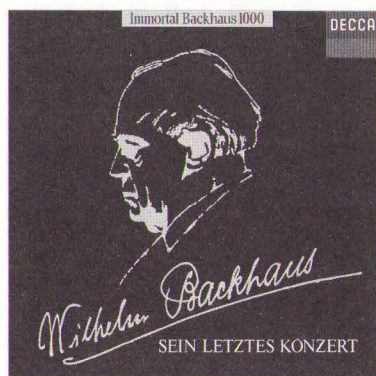
晩年のバックハウスはさまざまな栄誉に包まれてゆく。53年にはベーゼンドルファー社より「ベーゼンドルファー・リング」が贈られ、59年にはドイツ連邦共和国功勳章、大功



ベーゼンドルファー・リングをはめたバックハウス(1884～1969)



『読売新聞』昭和44(1969)年7月19日夕刊「音楽時評」



バックハウス／最後の演奏会
(ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番ハ長調 Op.53《ワルトシュタイン》、同第18番変ホ長調 Op.31-3 (第1～3楽章のみ)、モーツァルト：同第11番イ長調 K.331《トルコ行進曲付き》、シューベルト：楽興の時 D.780 Op.94、即興曲変イ長調 D.935-2 Op.142-2 (2種の演奏)、シューマン：幻想小曲集 Op.12～第1曲《夕べに》、第3曲《なぜに》)
ヴィルヘルム・バックハウス(p)
録音：1969年6月26 & 28日、オシアッハ修道院教会、ケルンテン(L)
デッカ © UCCD9185～6

労十字章を受章、61年にはウィーン・モーツァルト協会よりモーツァルト・メダルを授与、66年にはオーストリア共和国功績勲章、名誉大銀章を受章した。

そして、最後の演奏会の年、69年。まず3月26日、85歳の生誕記念演奏会がボン郊外バート・ゴデスベルクの舞踏会場「レドゥーテ」で盛大に開催された。ここでバックハウスはドイツ連邦共和国功績勲章、大功労十字星章（10年前よりも一等級上）を受章した。4月18日にはベルリンのフィルハーモニーでベートーヴェンのピアノ・ソナタ第15番（田園）、第18番、第21番（ワルトシュタイン）、第30番というプログラムで名演を聴かせている（2010年に独アウディエがCD化「AU 23420・2枚組」）。5月3日にはフィレンツェの5月音楽祭に出演して、オール・ベートーヴェン・プログラムを披露。日本から聴きにきていた演出家の三谷礼二を感激させた。

そして6月25日、バックハウスは第1回「ケルンテンの夏」音楽祭出演のため、オーストリア南部の風光明媚なケルンテン州、オシアッハを訪れた。オシアッハ湖の湖畔には11世紀に建てられた壮麗なオシアッハ修道院があり、ここを拠点とした音楽祭を元ウィーン・フィルのトランペット奏者で、楽団長も務めたヘルムート・ウオビツシュ（1912〜80）が発案し、創設した。ウオビツシュは音楽祭10周年時に回想する。

「修道院の中の教会（Stiftskirche）にはバックハウス以前の音楽を演奏するのに非常に適した、ケルンテン地方で最も古いオルガンがあった。バックハウスはこのとき初めてそこで演奏し、『ケルンテンの夏』の収益金により、もう一台大きなオルガンを所有したいという願いを実現させた。この偉大なピアノニストはオルガンの建設に大きく貢献し、彼の死後、『ヴィルヘルム・バックハウス記念オルガン』としてその名を刻む

ことになったのである」。

「少し休ませてください」

つまり、バックハウスの最後の演奏会「はウオビツシュの願いを聞いたことがきっかけだったのだ。演奏会は6月26日と28日の2日間、行なわれた（冒頭のUPIの記事、および吉田秀和氏の記事）中にある。29日は誤り」。

この2日間の演奏の模様はオーストリア放送が、鮮明なステレオ録音で収録し、その音源を英デッカがライセンスして今日、CDとして聴けるので、演奏会がどのような経過を辿ったかは、すでによく知られるところである。26日の演奏は予定通りに進行し、ミス・タッチが目立つものの、バックハウスの晩年のスタイルがよく現われた演奏を示している。ピアノの音そのものと音楽の造形の澄み切った美しさ、リズムの軽やかさ、響きの豊かさ、力強い生命力、こうしたものを大きく包み込むゆとり、風格。

28日はバックハウスが得意とするベートーヴェンのソナタ第18番で始まる。ところがバックハウスは第3楽章の演奏中に気分が悪くなり、第3楽章を終えると弱々しい声で「少し休ませてください（"Ich bitte um eine kleine Pause."）」と言って楽屋に戻ってしまったのである。このときバックハウスは心臓発作を起こしていた。短い休憩の後、「バックハウス教授はベートーヴェンのソナタを弾く代わりにシューマンの（タペに）と（なぞに）を弾かれます」とアナウンスが入り、この2曲を演奏したところで前半が



ドイツ連邦共和国大功労十字星章を贈られたバックハウス



生誕85年記念演奏会でのバックハウス

終了する。解説書によると、ここで医師団は演奏会の中止を勧告したが、バックハウスはそれを退け、事務局より「バックハウス教授はシューベルトの《即興曲》で今晚の演奏会を終わらせて頂きたいとの希望を述べられました」とアナウンスさせ、前日と同じシューベルトの《即興曲》変イ長調で演奏会を締めくくった。

バックハウスはその後、ケルンテン州フライラッハの病院に入院したが、30日に容態が急変する。そして7月5日、バックハウスはフライラッハの病院で亡くなった。死因はUPIによると脳出血、AFPによると心臓マヒであった。

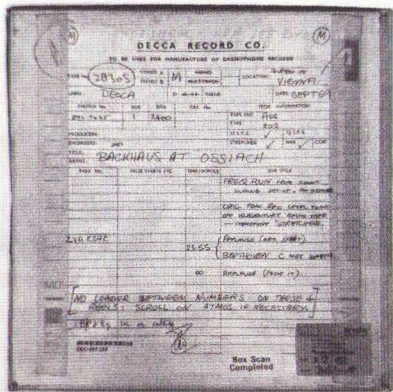
テスト・プレス盤までは作られたが海外では全曲を収めたLPは発売されなかった

「巨星落つ」しかも、現役巨匠の舞台上の死ということ、バックハウスの死は大きなニュースとなり、バックハウスと契約している英デッカは最後の演奏会のレコード化を計画する。最近発売された『ステレオサウンド』誌のSACD/CDのセットの解説書には、英デッカのマスター・テープの写真が初めて公開されているが、それを見るとオーストリア放送の音源からのレコード用のマスター制作は1969年9月だったこと、そして、当初のタイトルが「バックハウス・アット・オシアッハ」だったことがわかる。2009年にレコード研究家のフィリップ・ステュアート氏が作成した英デッカのディスコグラフィ「DECCA CLASSICAL 1929-2009」によると、英デッカはSET44142、米ロンドンではCS66666-67のレコード番号まで決めて、70年の発売を目指していたようだ。テスト・プレス盤までは作られたが（かつて中古市場にCS66666-67のテスト・プレスが出たことがあり、品番とタイトル

「バックハウス・アット・オシアッハ」が一致するので間違いないだろう）、結局イギリスとアメリカでこのLPが発売されることはなかった。その理由は明らかではないが、上記ディスコグラフィでステュアート氏が「LP未発売…演奏の弱点が長所を上回ったことが明らかである。また、

ベートーヴェンのソナタ第18番はフィナーレが省略された不完全なものである」とコメントしている通り、英デッカと米ロンドンは、レコードとしての不完全性（曲が完結していない、演奏ミスが多い、など）により発売を躊躇したものと思われる。2020年にリリースされた「バックハウス/デッカ録音集」[4834952]の解説書には「デッカはこの演奏のオーストリアのラジオ・テープをライセンスしていたが、85歳のバックハウスの演奏は当時リリースされなかった。様々なCDリリースでそれぞれのリサ ITALの一部分が収録されていたが、ここではデッカのアーカイヴに残っているものをすべて紹介し、シューベルトの《即興曲》変イ長調の2ヴァージョンも収録している。後者はバックハウスが最後に演奏した曲である。彼はその1週間後、フライラッハで亡くなった」とだけ記載されている。

日本ではLP時代からCD時代に至るまで再三再四発売されてきたので、不思議に思う方も多いだろうが、この録音は日本でだけLP時代からふたつの演奏会のすべての曲目が紹介されていたのである！そのきっかけとなったのは1970年に発売された独デッカ盤だった「SXL 20090」。独デッカはこのLPの2枚目だけを一枚物として発売した。すなわち、モーツァルトのソナタ第11番《トル



英デッカが1969年9月に作製したマスターテープの箱



ヴィルヘルム・バックハウス記念オルガン
© 1971markus@wikipedia.de

コ行進曲付き》、シューベルトの《即興曲》変イ長調（以上A面、26日ライヴ）、ベートーヴェンのソナタ第18番（第1〜3楽章）、シューマンの《夕べに》と《なげに》、シューベルトの《即興曲》変イ長調（以上B面、28日ライヴ）。独デッカは巨匠の最後のドキュメントとしてこのLPを制作したようで、タイトルは「ヴィルヘルム・バックハウス 偉大なピアニストとの別れ 最後の演奏会」となり、ライナー・ノーツには28日の朝のリハーサルから演奏会が終わるまでの模様が活写されていた（このドイツ語の文章は、日本盤LPと初期のCDでは音楽評論家の石井宏氏による、録音から感じられる模様を付加した名訳により掲載された）。また、ジャケットにはオシアッハ修道院教会で演奏するバックハウスの最後の写真が使われた。

入念な準備を行なって制作された 2枚組の国内盤

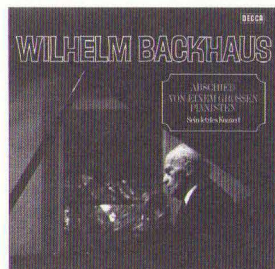
おそらく、この独デッカ盤が日本のキングレコード（当時英デッカと契約していた）の最後の演奏会の2枚組でのLP制作に結びついたのだろう。当時キングレコードに在籍された天沼澄夫氏（現SAKURAレーベル主宰）にお話を伺ったところ「バックハウス・ファンの多い日本でデイスコフィルな側面（もちろん2枚組にして売り上げ面のメリットも）で、完全収録になったのだと思います」とのことだった。キングレコードは1971年7月5日というバックハウスの三回忌に発売日を設定し、入念な準備を行なってこの2枚組を制作してゆく。まず、解説書に前述した独デッカ盤のライナー・ノーツの翻訳に加え、「バックハウスの思い出」を作家の五味康祐、音楽評論家の野村光一、作家の安岡章太郎、バックハウスと親交のあったピアニスト、深沢亮子の各氏に依

頼。最後には吉田秀和氏と篠田一士氏による対談（バックハウスを語る）を配する徹底ぶり。LPサイズの解説書は全15ページで、解説の他に折々のバックハウスの写真が18葉も掲載された。加えて装丁が黒の布張りの丈夫な箱と豪華で、表面にはバックハウスの横顔のイラストとサインが金で箔押しされ、内扉には同様に箔押しでバックハウスが好んだ金言集が刻まれている。シロンドン・デラックス・アルバムと銘打った2枚組「SLA1012〜3」は4600円、愛蔵家番号付き、1万部限定と決定された。バックハウスの死が舞台上の死であつたことが広く知られていたため、このレコードは非常に注目された。発売直前の発行となる『レコード芸術』71年7月号には、輸入盤試聴記として宇野功芳氏が独デッカ盤LPを2ページにわたって紹介している（ところが、ここで紹介された内容は2枚組で、実質的にはキング盤の紹介となっている）。そして月評が掲載された8月号には、グラビア・ページにピアニスト井内澄子氏による「バックハウス最後の演奏会をきいて」が4ページに亘って掲載されている。月評（小石忠男氏）での評価は準推薦だったが、見出しには「感動をさそふ白鳥の歌」とあり、内容は非常に好意的である。他誌も『音楽の友』（「巨匠たる音楽表現の究極」三谷礼二氏）、『ステレオ芸術』（「情緒を排した響きの奥から強く迫る感動」中河原理氏）、『藝術新潮』（「老大家ならではの滋味豊かな西条卓夫氏」と揃って絶賛で、日本では名盤としての評価が早くから確立した。そして、LPとCDでくり返し発売され、半世紀以上にわたって長く聴き継がれてきたのである。

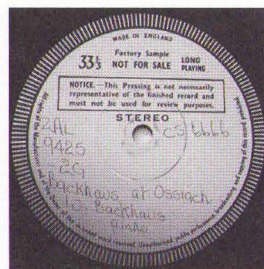
芸術的にもドキュメントとしても非常に価値の高い録音が日本だけで発売されてきたことは、日本の愛好家は誇りに思つてよいし、その裏には日本のレコード会社の影の努力があることを、この機会に広く知っていただきたいと思います。



キングレコード SLA1012〜3 のジャケット



独デッカ SXL20090 のジャケット



米ロンドン CS6666〜67 のテスト・プレス盤